

「第9回日本訪問歯科医学会」開催

訪問歯科診療に取り組む歯科医師、歯科衛生士、関連事業者により構成される日本訪問歯科協会主催の日本訪問歯科医学会が、2009年11月8日(日)、東京・港区で開催された。

第9回を迎えた本学会は「共に生きる——機能する在宅医療連携」をテーマに、柳澤融会長による「医療を提供するだけでなく、患者の訴えをしっかりと聞くことから治療が始まる」という挨拶から始められた。

プログラムは高瀬義昌氏(たかせクリニック)による「訪問歯科診療に役立つ認知症の知識」、川島孝一郎氏(仙台往診クリニック)による「在宅療養支援歯科診療所と病院歯科の連携と将来」の特別講演。認知症は今日、super common disease であると話した高瀬氏は会場からの質疑応答に、「歯科だけでなく、内科や総合診療科と連携していくチームプレイが重要」と答え、続く

川島氏は「医科と歯科の連携がなくてはならない時代」と、障害をもった人たちを支える①生き方に根ざした全人的歯科診療、②病院歯科との連携、さらに在宅医療が充実していけば救急搬送も減少していくと語った。仙台では拠点となる歯科診療所がかなりうまくできている、今後は連携で実績を積み上げようと。

会員発表は、訪問先でのメディカルインタビューのあり方、介護保険制度が始まる前から取り組んだ訪問診療について、健康学習をいかした訪問歯科診療など、6氏の実践。「訪問歯科診療をやるなら今しかない」「患者さんに喜ばれることは何でもします」という頼もしい言葉が印象的であった。

協力講演で石井拓男氏(東京歯科大学社会歯科学研究室)は、「後世、在宅歯科医療の転換期となった時代として(平成20年代が)記憶されることになると思う。期待している」と語られたが、それはきっと在宅ケアの質の向上としても、見えてくるのであろう。

看護師・介護職が診断・治療できるように 葉っぱのフレディ・ヘルパーセンター 10周年記念講演会

東京・中野にある葉っぱのフレディ・ヘルパーセンターは、本誌13巻8号「マグネットステーションインタビュー」でも紹介したが、11月14日(土)、開設から10周年を記念して感染管理事業のモレエンコーポレーションと品川イーストワンタワー(東京都港区)にて講演会を開催し、定員を上回る180人が参加した。

ヘルパーセンター代表である片山蘭子氏が開会挨拶を行なった後、森下幸子氏(日本感染管理ネットワーク ICNJ)により「在宅介護と看護に必要な『感染管理』のスキル」と題し、在宅で実践する感染対策が解説された。在宅での基本は標準予防策であり、感染対策には家族指導が必要なことが具体例とともに挙げられた。

続いては片山氏による発表「葉っぱのフレディ・ヘルパーセンター開設10年の流れと研修の成果」。開設のきっかけや開設以来続く定例学習会などの取り組みが紹介された。ヘルパーがプロとして自主的に学ぶ姿勢を身につけ、それがよいケアにつながったという成果を片山氏は挙げ、「『教育』という目標をもっていることがこの10年の支えになった。今後、利用者が安心してケアを頼めるようなブランドとしての周知をめざ



センターの命名者でもある日野原氏

したい」とまとめた。

休憩後、日野原重明氏(聖路加国際病院)により講演「看護と介護の現場に活かす『3つのV』」が実施された。3つのVとはVision, Venture, Victory。Visionはなにか、その達成のためにVentureを実践しているか、その結果としてVictoryの日がやってくると説明を加え、「古いことをやってもしょうがない。もっともっと発想を変えない」と基礎看護に間違いがあり、もっと科学的に一新する必要があることも指摘。最後に、これからの看護・介護は医学的な基礎をもち、診断・治療ができる必要がある、そのためには勉強しなければならないと結論づけた。